

令和 7（2025）年度 過年度卒業生対象アンケート集計結果

目的：社会人となった卒業生が本学在学中に身につけた学士力を、どのように認識しているかを明らかにする。

方法：こども心理学部およびモチベーション行動科学部が掲げる学士力の中から 16 項目を選定し、5 段階で評定する質問フォームを作成した。同窓会のメーリングリストから卒業後 2 年目の同窓生を対象として回答を求めた。調査時期は令和 8 年（2026）年 2 月～3 月。16 名（こども保育・教育専攻 7 名、心理専攻 6 名、モチベーション行動科学部 3 名）の回答が得られた。

結果および考察：

1. 回答者の就職先の内訳を図 1 に示す。回答者 16 名のうち、最も多かった就職先は一般企業（6 名）であった。次いで、保育所（私立）、こども園（私立）、学童がそれぞれ 2 名であり、幼稚園（私立）、小学校、児童養護施設、その他が各 1 名であった。

こども心理学部こども保育・教育専攻卒業生は、保育所、こども園、幼稚園、小学校、児童養護施設など、資格や学びを生かした領域への就職がみられた。こども心理学部心理専攻およびモチベーション行動科学部の卒業生は、一般企業への就職が多く、本学で培った心理学的知識や対人援助に関する学びが、多様な進路に活かされていることが示唆される。その他はオーストラリアでの就職であった。

図1 回答者の就職先 （n=16）

■ 一般企業 ■ 保育所(私立) ■ こども園(私立) ■ 学童
■ 幼稚園(私立) ■ 小学校 ■ 児童養護施設 ■ その他

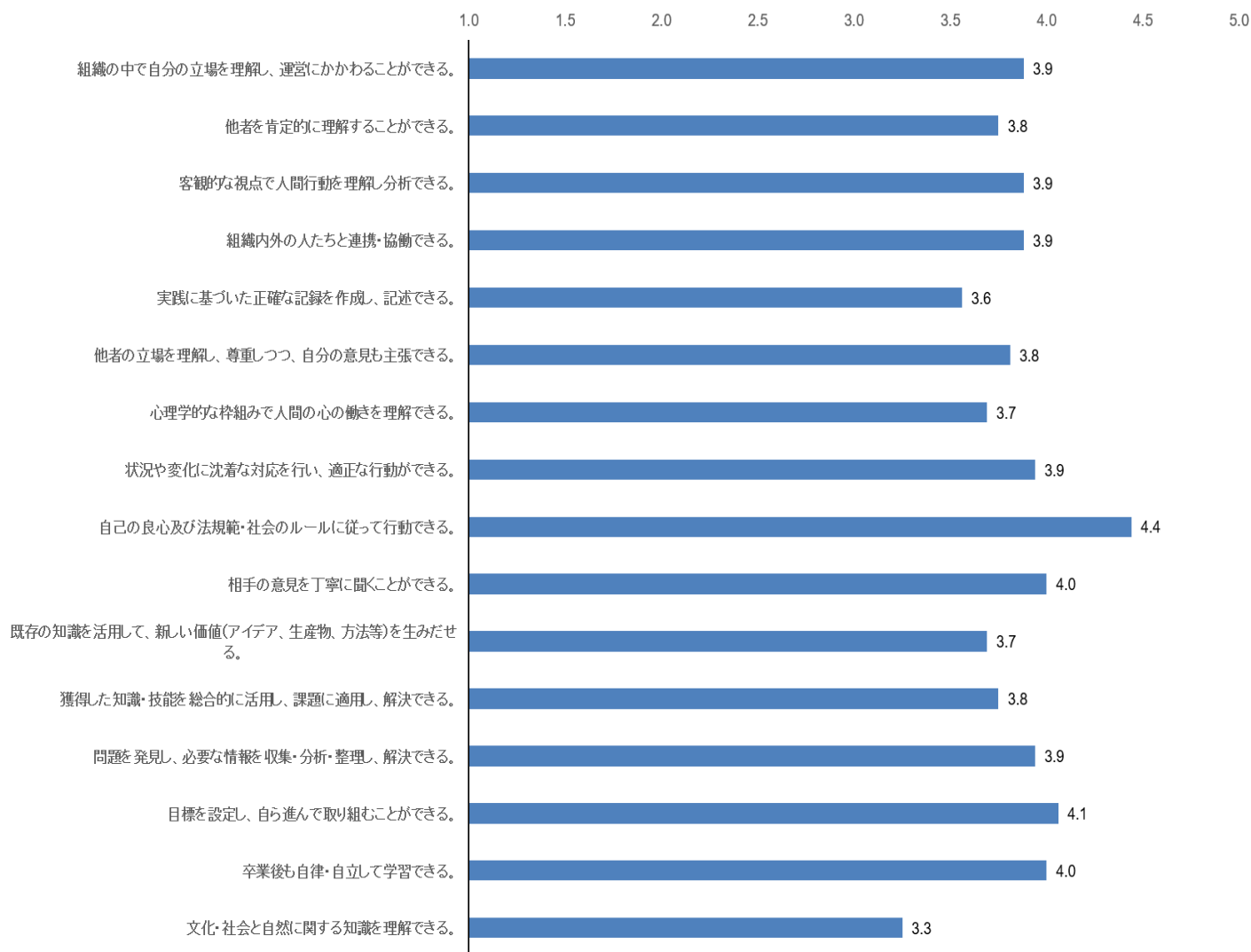


2. 卒業生の自己評定の結果を図2に示す。自己評定の平均値は全て3.0を上回っており、卒業生は学力がおおむね身につけていると考えている。特に高かった項目は、「自己の良心及び法規範・社会のルールに従って行動できる（4.4）」であった。次いで、「目標を設定し、自ら進んで取り組むことができる（4.1）」、「相手の話を丁寧に聞くことができる（4.0）」、「卒業後も自律・自立して学習できる（4.0）」が高い値を示した。

これらの結果から、本学での学びを通して、内的規範に基づいて行動できる社会性を備えるとともに、主体的に目標へ取り組む姿勢や、自律的に学び続ける力を身につけたと卒業生自身が認識していることがうかがえる。これらの能力は、対人援助職や一般企業を含む多様な職場において求められる「自律的な社会人」としての基盤を形成するものであり、本学での学びが卒業後の成長と適応に寄与していることを示唆しており、本学の教育成果を示すものと考えられる。

一方で、「文化・社会と自然に関する知識を理解できる（3.3）」や、「実践に基づいた正確な記録を作成し、記述できる（3.6）」は、比較的低い値であった。今後は、組織理解や実践的課題解決能力をさらに高める教育的支援や、実践的学習機会の充実が求められると考えられる。

図2 卒業生の自己評定 各項目の平均値(卒業後2年 全学部全学科)



3. 令和7年度の調査より、卒業生と就職先（企業）の評定平均値を比較した結果を図3に示す。多くの項目で就職先（企業）の評価が卒業生自身の評価を上回っていた。特に、「組織内外の人たちと連携・協働できる。」「相手の意見を丁寧に聞くことができる。」「他者を肯定的に理解することができる。」「卒業後も自律・自立して学習できる。」といった対人関係能力や主体的な学習に関する項目において、就職先（企業）から高い評価が得られていた。これらの結果から、本学卒業生は職場において良好な人間関係を構築し、周囲と協力しながら業務に取り組むことができる人材として評価されていることがうかがえる。

一方で、卒業生自身の評価が就職先（企業）の評価を上回った項目は、「自己の良心及び法規範・社会のルールに従って行動できる。」「客観的な視点で人間行動を理解し分析できる。」「既存の知識を活用して、新しい価値（アイデア、生産物、方法等）を生みだせる。」「目標を設定し、自ら進んで取り組むことができる。」であった。

全体としては、卒業生自身と就職先（企業）の評価は概ね類似しており、本学で培われた学士力が社会において一定程度発揮されていることが示唆された。特に、対人関係能力や協働性については就職先（企業）から高く評価されており、本学の教育成果の一端を示す結果と考えられる。一方で、「文化・社会と自然に関する知識を理解できる。」や「既存の知識を活用して、新しい価値（アイデア、生産物、方法等）を生みだせる。」は卒業生・就職先（企業）ともに比較的低い評価であったことから、今後は幅広い知識の活用や創造性をさらに高める教育的取り組みを検討する必要があると考えられる。

図3 項目別評定平均値の比較 卒業生自身と就職先（企業）

